

ミュージアムで「キャンセルカルチャー」 は起こったのか？

——脱植民地化と人体のアイデンティティ政治を
めぐる博物館倫理

小 森 真 樹

はじめに

「フィラデルフィアで一番奇怪な博物館へキャンセルカルチャーがやってくる」
——2023年夏『ウォールストリートジャーナル』に見出しが踊った。奇怪な博物館とは、米国最古の医学博物館ムター博物館のことである。寄稿者は、同館を運営する協会の元会長だ。さて、ここでいうキャンセルとは何を意味しているのだろうか。誰がどのように、何をキャンセルしたのだろうか。何かがキャンセルされたのなら、それは「カルチャー」だったのか。ミュージアムには本当にキャンセルカルチャーが起こったのだろうか？

ミュージアムや展覧会というメディアは、公的な空間で意見を交わす優れた手段である。現代美術展は社会の課題を鮮明に提示し、歴史展示は歴史観を巡る衝突を通じて社会の多様性を可視化する。一方、近年では展示を巡る不健全な摩擦も目立つようになった。ソーシャルメディアが普及しウェブ上で意見を交わすことが日常化した現在、展示への抗議が、ときに集団による激しく一方的な攻撃へと発展する事例が絶えない。日本国内では、あいちトリエンナーレ2019の企画「表現の不自由展・その後」に対して起こった騒動が知られていよう。法的手段によらず、対象に不利益となる情報拡散などの方法によって威圧的に内容の変更や取り下げを迫る行為は一部で「キャンセルカルチャー」とも呼ばれ、ルールやマナーでは制御されない不健全なコミュニケーションの典型として知られるようになった。この用語は、米国の政治で保守派が敵対者を批判する文脈において普及した

ものである¹。

冒頭の記事の誤りを指摘することが本稿の目的ではない。そうではなく、価値観の摩擦や対立が博物館においていかに表れているのか、また、博物館のコミュニケーションについていかなる枠組で理解すべきなのか、価値判断については留保しながら考えたいのである。博物館と周辺のコミュニティ、及び、言論や思想など時代状況に位置づけてムター博物館における規範と倫理の変化について考察することで、倫理観が社会で変する時期に生じるコミュニケーションを理解するための枠組みについて批判的に検討したい。

ある立場から「キャンセルカルチャー」と名指された事態は、社会の変化に伴う博物館倫理と規範をめぐる対立の表れと見なすことができる。以下本論では、ムター博物館が脱植民地化プログラムを進める過程で起こった抗議と騒動を事例に、医学博物館や民族学博物館など遺体を扱うミュージアムが脱植民地化改革を実施する際に生じうる課題について検討していく。同時に、この「キャンセルカルチャー」の内実の検討を通じてその解釈枠組の脆弱性を示したい。倫理や規範の変化に反動や摩擦はつきものだが、そのコミュニケーションを理解する枠組みにも注意を払いながら議論を進めていく²。

1. パブリックへ——科学から芸術、そして娯楽へ

科学共同体から科学教育へ

ムター博物館（以下、ムターと表記）は、1863年アメリカ合衆国フィラデルフィアに創設された全米初の医学博物館である。母体のフィラデルフィア医師協会に属すトマス・デント・ムター博士が協会へ寄付した、人体標本、模型など病理学コレクションを元に博物館は開館された。全米初の医学校ペンシルベニア大学を1831年に卒業したムター博士は、医学先進国であったフランスのパリ大学へ留

¹ 前嶋和弘『キャンセルカルチャー——アメリカ、貶めあう社会』小学館、2022。

² 2020年頃から続く本件が扱う騒動は、本稿執筆時点においても一度目の公聴会が開かれたというタイミングで未だ渦中にある。確定しない事項も多いが、記録も旨にこの機に論じておきたい。本稿で示した理解や解釈が再考すべきものとなる可能性も大いにあり得るという点にも留意されたい。

学して外科・解剖学を学んだ。当時多くの米州法で遺体の解剖は違法であったため、ムター博士は模型や標本を蒐めて持ち帰り、これらの米国で希少なモノを臨床や研究に利用するために共有し、医学の発展に貢献した³。創設の事情に見られるように、当初同館の目的は医学研究の発展であった。

こうした科学者の共有物品管理場としての博物館は、次第に公衆 (the public) の科学教育の場へと舵を切っていく。この背景には、解剖学の手法が古くなり顕微鏡を使う微生物学が研究の中心となったこと、特に場所を占有する標本が博物館運営の課題となっていたことがある。また、同館は「博物館」機構として運営されたため、公衆への公開原則が重視されたこともある。その理念や方針は同時代の他の博物館の規範から影響を受けた。文化史家キャロル・ダンカンは、同時期創設された米国の博物館は、国を分断した南北戦争の余波から、「アメリカ人」という枠組で市民教育を行う機能を有していたと論じている⁴。手続きの煩雑さなど実態はさておいても、英国など他国の医学博物館と比べてムターは非専門家への公開が早く、20世紀初頭には、手続きさえ踏めばそのコレクションは利用可能な状態に置かれていた。

米国 200 周年祭と観光地化

1970年代以降になると来館者動員を重視する社会的・経営的要請から運営が見直されていった。契機は、1976年の米国建国200周年祭だった。建国期の首都であったフィラデルフィアでは歴史文化観光が重点化され、例えば市観光局はムターを「米国医学誕生の地」と観光施設として位置づけた。75年同館もまた観光重点化改革を実施し、その目的に「過去200年に渡り米国市民の健康と福祉の発展に貢献

³ 協会の年鑑 College of Physicians of Philadelphia. “Annual Report of the Mütter Museum and College Collections,” *Transactions and Studies of the College of Physicians of Philadelphia (1959-2002)*; 公式カタログ Gretchen Worden, *Mütter Museum: Of the College of Physicians of Philadelphia*. (Blast Books, 2002); またムター博士に関する唯一の伝記 Christin O’keefe Aptowicz, *Dr. Mütter’s Marvels* (New York: Gotham Books 2014) を参考にされたい。ただし、伝記は館関係者により事実誤認が指摘されている点も留意。

⁴ Carol Duncan *Civilizing Rituals: Inside Public Art Museums* (Routledge 1995), 47-71 (『美術館という幻想——儀礼と権力』川口幸也訳、水声社、2011)。

した医学による「進歩の顕彰」を掲げた。改革は、専門家を主眼としていた博物館のこれまでの性格を、公衆に向けた医学教育及び社会貢献へと変える転機となった。

米国において博物館とは、万博やオリンピックのような大規模な祝祭を通じて都市構造へと組み込まれてきた⁵。フィラデルフィアを核に全米を席卷した米国には200周年祭もまた、博物館を再定義しながら都市の構造とアイデンティティを組み替えていった。1960年代には科学博物館が消費文化に組み込まれたとされるが、それを追うように医学博物館も娯楽化を果たしたのである⁶。博物館への来訪とは娯楽であり、また「アメリカ市民」という国民国家の一員としてのアイデンティティを獲得する過程でもあった。それはダンカンが「博物館を通じた近代国家の儀礼」と称し、社会学者トニー・ベネットが、近代のまなざしを獲得する「展示のコンプレックス」の一部と見なすものである⁷。こうしてムターは、医学史教育によって「米市民」意識を構成する観光アトラクションへと変容していったのである⁸。

医学芸術と人類学者ウーデンの改革

学芸員のグレッチェン・ウーデンは1974年に前任のエリザベス・モイヤーの補佐に着任後、1970年代以降改革の旗手となった。改革の核は、医学コレクションを「芸術」と価値づける事業である。「代表的なコレクションの選出」「ディスプレイによる芸術性の演出」「医学コレクションによる芸術展」「芸術家とのコラボレーション」と分類できる四種の手法で、医療器具や図版、人体標本を美学的なコンテクストで評価した⁹。その展示史・美術史的な背景を繙けば、「医学芸術

⁵ James Gilbert, *Whose Fair? Experience, Memory, and the History of the Great St. Louis Exposition* (University of Chicago Press, 2009).

⁶ Sharon Macdonald, "Expanding Museum Studies: An Introduction," *A Companion to Museum Studies*, ed. Sharon Macdonald (Blackwell Publishing, 2006), 1-12.

⁷ Tony Bennett, "The Exhibitionary Complex," *New Formations*, 4 (Spring, 1988), 73-102.

⁸ Masaki Komori, "Dead Bodies on Display: Museum Ethics in the History of the Mutter Museum," *The Journal of American and Canadian Studies*, Sophia University Institute of American and Canadian Studies, 35, 2018, 49-74.

⁹ ムターの芸術改革については以下の論文に詳述。小森真樹「芸術化する医学博物館——フィラデルフィア医師協会ムター博物館における改革」『展示学』日本展示学会、54、2017、62-71。

(ars medica)」という概念操作が役割を果たしたといえる¹⁰。米国ではちょうど同市内のフィラデルフィア美術館が1940年代以降駆動的に医学芸術を蒐集し、その名を冠したコレクションや研究所を設けてきた。この概念はロンドンやベルリンなど医学コレクション自体が極めて豊富な欧州へも波及し「医学芸術」の展覧会が開かれるようになり、そしてムターの事業もその種のものと見なされていった。博物館の種別がモノの価値を変容させると文化批評家ジェイムズ・クリフォードが論じた「文化＝芸術システム」論に倣えば、こうしたコンテクスト形成の過程を経て、「医学的器物 (medical artifact)」は「芸術 (art)」へと変容したのである¹¹。

ウーデンは優れた広報戦略で知られた。人気ホスト デイヴィッド・ラターマンの番組に出演し、ロボットミーム手術器や人間に生えた角でセレブリティとふざけ合ったように、やや悪趣味だが、当時の社会規範では「線を超えて」いない広報でムターの名を全国に知らしめた。

テンブル大学で人類学を学んだ彼女の教育背景は、医学者であった学芸員前二者と対比できる¹²。この時期、米社会は公民権運動やカウンターカルチャーなどを経て非西洋社会へと目を向けていた。カルロス・カスタネダの民族誌『ドン・ファンの教え』のように神秘主義的なものやエキゾチズムが人文学を超えて一般社会を魅了していた¹³。他方で、その後文化人類学に起こる反省的なうねり、つまり、クリフォードらがポスト植民主義的な批評を痛烈に展開した「批判人類学」が現れた時代の狭間にあったといえる¹⁴。

¹⁰ 小森真樹「遺体が芸術になるとき——医学博物館が拡張する「芸術」と医学教育の倫理」『民族芸術学会誌 Arts /』民族芸術学会、37、2021、126-139。

¹¹ James Clifford, *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art* (Harvard University Press, 1988), 221.

¹² ただし人文社会系の文化人類学ではなくより医学に近い形質人類学だった点も付記すべきだろう。米国の研究機関における「人類学」の一般的な下位区分は、「社会・文化人類学」「言語学」「考古学」「形質 (自然) 人類学」である。

¹³ Carlos Castaneda, *The Teachings of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge* (Berkeley: University of California Press, 1968) (『ドン・ファンの教え』真崎義博訳、太田出版、2012) 以降のシリーズは全米ベストセラーとなった。Ray Walters, "Paperback Talk," *New York Times* (January 11, 1981).

¹⁴ Clifford, *ibid.*



図① 第一期博物館改革の立役者となったグレッチェン・ウーデン（左）。トークショーで医療器具を紹介、ロボットミー器具で笑いを取っている場面¹⁵

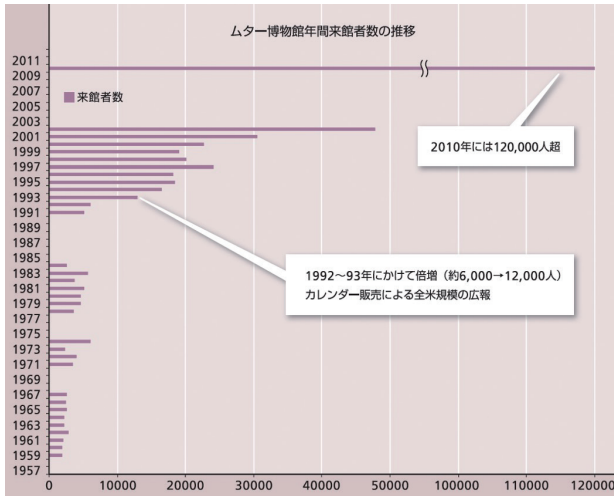
経営重点化と娯楽大衆化

ムターの芸術化は、美術史の研究及び教育という「美術館」の目的とは異なり、あくまで公衆への医学教育のためと位置づけられている。その歴史的由来や指向性からして、必然的に商業主義へと傾斜していった。市民の啓蒙という理念に後押しされ、普及を旨とした来館促進広報やグッズ開発が実施された。その過程で「芸術」は同時に「娯楽」という役割も強く担うことになった。

娯楽事業拡大の契機には、1992年に始まる「三カ年計画」があった。外部評価機関を取り入れて運営や広報を見直した経営学的改革によって、来館者数も飛躍的に増加した（図②）。翌年に始めたカレンダー事業がグッズ開発の契機を開いた。写真家ら芸術家と協働した特別展のグッズとしてこれを販売したところ、思わぬ大きな反響が得られた。ウーデンらは宣伝に効果的だと気がつき、以降普及事業として恒例化した。この経緯に見られるように、当初は娯楽性を売りとする計画も素朴なものである¹⁶。

¹⁵ “Late Night with David Letterman,” Season 9, Episode 160, NBC, aired on January 30, 1991.

¹⁶ 小森 2021, 131。



図② ムター博物館年間来館者数の推移¹⁷

しかし、ひと度多くの人々に知られると変化が起こる。ムターの人体展について、怖いもの見たさや好奇の眼差し、異形への畏怖といった評判が高まると共に、運営側でもそれら社会が求めるイメージを追随していった。「気味が悪いほど勉強になる (Disturbingly Informative)」「醜いが、恐るべき美しさ」等と事業の中でこうした文脈に合致するキャッチフレーズを多用するなど、演出面にこのことが窺える¹⁸。旧来の正統な医学教育に加えて、報道・批評による語りと芸術展を媒介として、「恐怖の館」に「医学的な異形」を求める人々も増えていく。遂には、こうしたファン層に向けたグッズ開発が大々的に行われる事になった。

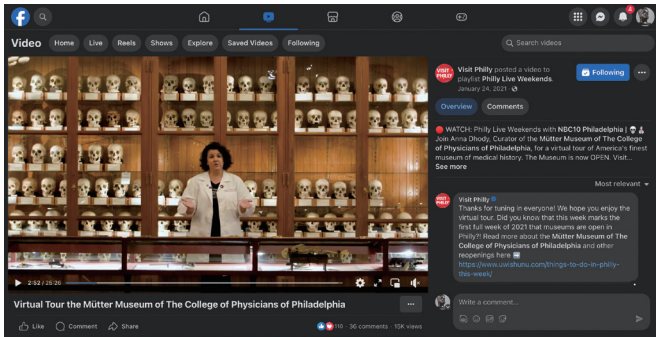
人気を得たコレクションがアイコンとして選ばれ、オリジナルグッズが開発された。その特徴も、「異形」や「恐怖」など奇怪さ (bizarre) の強調から、次第

¹⁷ 帳簿、年次報告、事業計画書等の部分的に残る記録から推移を割り出したもの。Annual Report, CPP Box 28, 6, Transactions and Studies of the College of Physicians of Philadelphia (1959-2002); Subseries B. Visitor Records, 1887-1985, CPP 10/007-02, Box18, Folder1-6, Box19, Folder1-6; Box20, Folder 1-9, Box 23, Folder 5, MMR; Museum Admissions Statistics, 1997-1998, CPP 9/001-01, Box 47, Folder 3.

¹⁸ これらのフレーズはムターでは定番のもので各所で使われるもの。Worden, 2002 など。

にポップな装いをつけるものへと移行していく。ハイライトのコレクション＝グッズの代表例には、結合双生児（いわゆるシヤム双生児）のクッキー型、76センチに肥大化した大腸をデザインしたぬいぐるみ、「ソープ・レディ」の名で知られる屍ろう（石鹼化）遺体を象ったハンドソープなどがある¹⁹。2004年にウーデンが逝去したのち芸術路線以上にこうした娯楽傾向がいつそう高まっていった²⁰。

2015年頃からはSNSでの広報を積極化した。ウーデン後任の四代目学芸員アンナ・ドーディの下で、インスタグラム、フェイスブック、YouTubeでコンテンツを開発・発信し始めた²¹。



図③ デジタル技術も積極的に導入し教育普及事業を進めたアンナ・ドーディ。フィラデルフィア観光雑誌のFacebook番組でコレクションについて解説している場面²²

ムターにおいては、博物館という機関を通じて「科学」が専門家の手から公衆へと開かれ、人体を含む医学的モノが、「研究」から「教育」へとその意味を変容させていた。そして展示史や美術史及び社会の変化を背景に、教育やアウトリーチのための演出手段として「芸術」という手法が発明、採用され、人体という文

¹⁹ 小森 2021、131-33。

²⁰ ウーデンのパートナーとして芸術家事業を進めてきた編集者ローラ・リンドグレン氏による見解。Laura Lindgren, email to author, January 5, 2017。

²¹ 小森 2021、134-36。

²² “Virtual Tour the Mutter Museum of The College of Physicians of “Philadelphia,” Visit Philly (January 24, 2021).

化資源の活用方法が拡張していった。ムターが掲げる「米国社会のための医学教育」の方針は、畢竟、「芸術」事業を「娯楽」的な方向へと傾斜させていった。

2. エシックスへ——再編される博物館倫理と人体

博物館のミス・コミュニケーション

しかしながらムターにおいて、人の遺体を「モノ」として扱うことに対する倫理的な批判はこれまで存在しなかったのだろうか。実際のところ、これまでも報道や研究者などが小規模な形で批判の声を上げることはあった。倫理面での批判が出版物で確認できる最初の例として1992年に新聞の文化面で報道されたものがある。2013年には骨考古学者が当時の館長ロバート・ヒックスの講義に対してある人体を扱う倫理の二重基準を批判している²³。後者の例では、ソープレディは蒐集当時同意はなく、恐らく盗掘で入手されていると指摘されている。しかし館長は、「科学的貢献」という高尚な目的を掲げ、埋葬や返還など扱いを見直さないことを正当化している。批判する考古学者は、関係者への取材や講演での公式の発言をもとに、好奇の対象として遺体を商用利用しているのではないかと問題提起をしている。この種の倫理への問いに答える際に博物館側は、「我々が意図していたのは医学教育であり、その手段としての娯楽化であり、意図が来館者にミス・コミュニケーション（誤解・誤読）されている」と述べる。この公式見解は一種の型のように繰り返されてきたものであり、一つ目の記事でも同様である。見解を文字通りに解釈することももちろん可能であるが、事態を把握した上で——1990年代から2010年代まで——その運営方針や語りを維持してきたのであれば、批判を避けるためのある種の方針としてきたと見ることも可能であろう²⁴。「誤読だ」という議論の回避はその場しのぎのものにすぎないとも見えるが、いずれにしても、この時期の博物館のコミュニケーションにおける一種の倫理観を示すものではあろう。

²³ Judith Stone, "The Mutter of All Museums," *Discovery* (January 1992, 14); Jess Beck, "Bring Out Your Dead: Navigating the Ethics of Displaying Human Remains in Museums," *Bone Break*, <https://bonebroke.org/2013/12/01/bring-outyour-dead-navigating-the-ethics-of-displaying-bodies-in-museums/>.

²⁴ 議論の詳細については小森 2021、136-39。

「新しい社会主義」としての多文化主義と第一波「ポリティカル・コレクトネス」

こうしたムターの事例に見られた「博物館倫理」について、時代状況にも位置づけておきたい。1990年代の米社会では、多文化主義が狭広い領域で普及し、その結果各組織ではそうした思想に基づいた改革案が施行されるようになった。この文脈で博物館コレクションにおける人種間での扱い方の違いなど「遺体にまつわる人種主義」への批判も現れてきたと理解することもできるだろう。前章で論じた1980年代の批判人類学は、学問と教育が交差する博物館に焦点をあて人種主義批判を行った先駆とみなすことができる²⁵。

一方、多文化主義は保守派にとり新たな脅威として映り、保守反動的な物語を生んだ。ソ連やユーゴスラビアなど社会主義国の崩壊と民族独立は、一方で共産主義の理念を瓦解させたが、米国内においては多文化主義が社会主義諸国に代わる「新たな脅威」として理解されるようにもなった。文化的多元主義 (cultural pluralism) とは異なり、白人支配層が制御できない基盤と規範のなかで民族が多様化することを是とする「多文化主義 (multiculturalism)」は、米国社会の分裂や「アメリカ精神」の終焉をまねく。保守派のアラン・ブルームやアーサー・シュレーシンガー Jr. はこうした見方をとった²⁶。

こうした多文化主義に対する反動のように、米国内の多様性が可視化されるなかで、進歩主義と保守主義が価値観の領域で鋭く対立する状況が目立つようになった。こうした状況は一般に「文化戦争」と呼ばれている。1990年に起こった「ポリティカル・コレクトネス (以下、PC) 論争」は、その一例である。現在「PC」とは映画やテレビ、広告などの領域で人種、ジェンダー、性などに関

²⁵ その他代表的な研究に、Ivan Karp and Levine, eds., *Museums and Communities: The Politics of Public Culture*(Smithsonian, 1992).

²⁶ 油井大三郎「いま、なぜ多文化主義論争なのか」『多文化主義のアメリカ』(東京大学出版会、1999)、1-18; Alan Bloom, *The Closing of the American Mind* (PenguinBooks, 1988). (『アメリカン・マインドの終焉』みすず書房、1988); Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Disuniting America: Reflections on a Multicultural Society* (W.W.Norton&Company, 1992). (『アメリカの分裂——多文化社会についての所見』岩波書店、1992)。冷戦崩壊を自由主義に対する共産主義への勝利とみる「歴史の終焉」論で知られるフランシス・フクヤマは、彼らの弟子筋に当たる。

わる「表現の様式」の問題として理解されることが多い言葉だが、振り返れば第一波的展開とも呼ぶことができる1990年当時の「PC論争」は、文化戦争状態で保守派が採った言論戦術であった²⁷。

つまり、元を辿ればPCは論争というよりも制度改革であったが、批判する者がその対立構造を強調して論争化させたという経緯がある。1980年代からとくに大学運営の文脈で、人種、民族、国籍、宗教やジェンダーなどの不均衡を是正する措置として広がったもので、具体的には、女性学やアフリカ研究、アジア研究などマイノリティに関わる学部の創設、アフーマティブ・アクションによる学生の持つ属性の多様化、ヘイトスピーチやセクシャル・ハラスメントなどへの制度的対応が挙げられる。こうした制度改革は同時にイデオロギーや価値の対立をはらむものであった。男性、白人、アングロサクソン、プロテスタント、いわゆる健常者など、既に特権的な属性を有するマジョリティの立場で立脚した社会構造を再編することは、価値観をめぐる「文化戦争」として論争化させやすいものでもあったのである。

1990年10月『ニューヨークタイムズ』紙に「PCという覇権の高まり」という記事が掲載され、また翌年5月ミシガン大学で当時のジョージ・H・W・ブッシュ大統領が演説を行って「第一波PC」の主張の雛形が生まれた²⁸。「言論の自由の弾圧であり、不寛容さが拡大している」という、当事者性に基づく保守派の被害者的主張は、価値をめぐる歴史や制度を改革する際に度々登場する²⁹。ここ

²⁷ 清水晶子、ハン・トンヒョン、飯野由里子『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』有斐閣、2022。

²⁸ Richard Bernstein, "IDEAS & TRENDS: The Rising Hegemony of the Politically Correct," *New York Times* (October 28, 1990). 本記事でPCは「スターリン主義的な正統主義を連想させる」と社会主義に紐づけられている。そこで挙げられているのは、「人種、エコロジー、フェミニズム、文化、外交政策」などの範囲であり、アカデミズムの傾向としては、アフーマティブ・アクション、女性学、ゲイ・レズビアン研究、アフリカ系アメリカ人研究、カルチュラル・スタディーズが取り上げられている。Maureen Dowd, "Bush Sees Threat To Flow Of Ideas On U.S. Campuses," *New York Times* (May 5, 1991).

²⁹ 近年の例として、「批判的人種理論 (Critical Race Theory)」「大取り替え説 (The Great Replacement Theory)」など挙げられる。"Kimberlé Crenshaw on Critical Race Theory, Intersectionality and the Right-Wing War on Public Education," *Democracy Now!* (February 6, 2023); "Buffalo Massacre: Gunman Cited Racist "Great Replacement" Conspiracy Theory Popularized by Fox News," *Democracy Now!* (May 16, 2022).

において「PC」は兵器化した論争の道具となったのである。

可視化された性差別や人種差別といかに対峙していくべきなのか、可視化されたマイノリティといかに共生していくべきなのか。米国社会で取り組むべきこれらの命題が取り組むべき課題として俎上に上がると、人種差別や性差別の構造(systemic racism/sexism)を正そうとする制度改革、すなわち「PC」に対しては反動的に攻撃が加えられるようになった。

博物館の法整備——NAGPRA

こうした時代状況のなか、博物館でも法整備が進んでいった。その規範として影響力を持ったのが1990年制定の連邦法「米国先住民の墳墓の保護と帰還に関する法律」(以下、NAGPRA)である³⁰。以降ムターで起こる改革の背景を把握するため、本項ではその内容を概観し、また法規および運用上の課題点を指摘したい。

連邦法であるNAGPRAは、博物館や研究機関に対して、「アメリカ先住民」、つまり、直系傍系で文化的に関わるアメリカインディアン部族、アラスカ先住民コミュニティ、ハワイ先住民の文化財を帰還させる義務を定めている³¹。ここで定義される「文化財」とは、遺骨、副葬品、聖遺物などのことである。また、同法は、アメリカ先住民文化財の計画的な発掘つまり調査方法についての適正化も定めている。法が適応される対象は、連邦政府機関及び連邦政府から資金提供を受けている機関に限られるが、他方でその後各州法の整備や、より広い博物館・学術コミュニティにおける規範としても機能してきた³²。

規範としての機能が働いてきた理由としては、単に連邦法であるというだけで

³⁰ 原語は“The Native American Graves Protection and Repatriation Act.”その解説は以下が参考になる。Kathleen S. Fine-Dare, *Grave Injustice: The American Indian Repatriation Movement and NAGPRA* (University of Nebraska Press, 2002).

³¹ コミュニティの元へ還るという主体を尊重して「帰還 repatriation」を「返還 return」と呼び分ける場合がある。現状では慣例的に「返還」とされることが多いが、本稿ではこの意味で基本的に「帰還」を用いる。

³² Amy Lonetree, *Decolonizing Museums: Representing Native America in National and Tribal Museums* (The University of North Carolina Press, 2012).

なく、その先例にユネスコ条約・国際法があるという点も指摘できる。NAGPRAに先行する具体例は1954年のハーグ条約である。武力紛争における文化財の保護を定めた最初の国際法だ。この意味で、国連という、西側諸国を中心につくられたグローバル・コミュニティの規範が、国内法を通じて次第にトップダウンの方向で社会内に配備されてきたものと見ることができる。

だが一方で、法の成立、実行力を社会へ組み込むには、社会運動家や先住民コミュニティの当事者の不断の努力こそが肝要だったことは強調しなくてはならない。一例のみ挙げることが許されるなら、“NAGPRAのローザ・パークス”マリア・ピアソンが尽力し成立させ、NAGPRAへ至る法整備の第一歩となった1976年の「アイオワ州埋葬者保護法」がある。アメリカ先住民の遺骨を特別に保護することを初めて定めたこの米国内法は、1970年代工事中に発掘された先住民と白人の骨の扱いの違い——先住民の遺体のみが研究対象として博物館へ送られるのが常であった——に対して、ピアソンがアイオワ州知事へ人種主義であると陳情したことから生まれた。この意味で、NAGPRAへと至る道筋はボトムズアップなものでもある。

なお、2023年時点の報道によれば、博物館を含む米連邦が運営する660の機関が有する「アメリカ先住民」の遺体数は推定十万名分以上と目されており、約21万名分とされた1990年試算の49%程度とされる³³。

NAGPRAでは放置されてきたこうした「モノとしての遺体」を人道的に扱う大きな契機となった。今後の課題として、範囲が連邦機関に限られる点、手続きが各団体・博物館に依存し遅延しがちな点、期間対象が「部族」認定された、かつ、「先住民」に限定される点などが指摘できる³⁴。とりわけ、1985年市内で起こった

³³ 617の機関が「アメリカ先住民の遺骨があると報告」、104,539機関＝全体試算の49%が「これらの遺骨のうち部族に提供されていないもの」、590の部族が「遺骨を機関から提供された」とされている。Ash Ngu and Andrea Suozzo “NAGPRA Database,” ProPublica (January 11, 2023). 2023年4月26日以降のデータに基づく。

³⁴ “Native American Graves Protection and Repatriation Act: After Almost 20 Years, Key Federal Agencies Still Have Not Fully Complied with the Act,” U.S. GAO: Office of Public Affairs. U.S. Government Accountability Office (July 10, 2010).

MOVE 黒人地区爆破事件における被害者がペンシルベニア大学考古博物館に蒐集されていたことが近年判明し、現在まで黒人の蒐集遺骨の扱いも露骨な人種主義に曝していることが明らかになった³⁵。

NAGPRA の公開目録によれば、ムターには48名の先住民の検体がある³⁶。NAGPRA 事務局のメラニー・オブライエンによれば、ムターから先住民へその数点はすでに返還されたという³⁷。

多文化主義など社会の価値観が大きく変化するにしたがい、それらが制度へと実装されていく過程では保守反動的な動きが現れ文化戦争状態となった。一方博物館においては、国際機関やグローバルな博物館共同体、また連邦法などを通じて、これまで続いてきた社会運動など草の根的な活動の成果が法・規範として実体化してきた。既に見たとおり、ムターは原則公開を旨とする近代博物館の理念を有する医学博物館の正統であるが、そうであっても、実態としてはこの種の博物館倫理規範がただちに機能したとはいえない状況にあった。経営改革期のムターを時代状況に位置づければこのように総括することができる。

³⁵ 歴史的に、研究対象とされてきた他の人種・民族のカテゴリーについてこの法は対象としない。アフリカ系アメリカ人は、タスキギー大学での人体実験などの問題で知られる通り、医学・軍事研究においても人種差別の被害者にされた例が多い Harriet A. Washington, *Medical Apartheid: The Dark History of Medical Experimentation on Black Americans from Colonial Times to the Present* (Anchor Books, 2006). 1985年フィラデルフィアでは、連邦捜査局 (FBI) と市警察が黒人解放組織を制圧するために、住民地区にヘリによる爆撃まで起こした MOVE 爆破事件が起こり、子供を含む被害者遺体がペンシルベニア大学民族学博物館に蒐集された。さらに2021年には教育ビデオで関係者が遺体を「ジュシーな〔興味深い／新鮮な〕死体」など呼び冗談にしたことから、遺族らからの強い批判に晒され帰還に至った。“Bones of Black children killed in police bombing used in Ivy League anthropology course – Philadelphia,” *The Guardian* (April 22, 2021). ムターの事例を含め博物館における人骨の扱いを論じているサミュエル・ラドマンは、黒人への適法の必要性を訴えている。“Bone Rooms: How Elite Schools and Museums Amassed Black and Native Human Remains Without Consent” *Democracy Now!* (April 30, 2021); Samuel J. Redman, *Bone Rooms: From Scientific Racism to Human Prehistory in Museums* (Harvard University Press, 2022).

³⁶ 2023年10月27日執筆時点。多くはイリノイ州セントクレアからのものである。“Inventory, NAGPRA,” National Park Service. <https://grantsdev.cr.nps.gov/NagpraPublic/Home/Inventory>

³⁷ Maura Judikis, “Controversy at Philadelphia’s Mutter Museum over human remains” (タイトル変更前 “A museum’s historic human remains are now the center of an ethics clash”) *Washington Post* (July 27, 2023).

3. 博物館倫理変化とバックラッシュ

BLM 運動と脱植民地化運動の進行

こうした博物館倫理を大きく変化させる触媒となったのが、一人の人物の命を奪った悲惨な事件であった。世界がコロナ禍にあった2020年5月25日、ミネアポリスの路上で黒人男性のジョージ・フロイドが警官に約十分間もの間制圧された末に殺害された。夜8時頃だがまだ明るく周囲には人だかりができ、警官を説得して止めるよう声をかけるものもあり、動画に記録された様子は目撃者によってソーシャルメディアを通じて世界へと配信された³⁸。翌日にはミネアポリス周辺で大規模な抗議行動「ブラック・ライブズ・マター（以下、BLM）」運動が起こり、瞬く間に全米そして世界へと拡大していった。翌月の世論調査は、その規模において公民権運動さえ超える米国史上最大のデモとなったと報じた³⁹。

訴えの中心は、警察による暴力とその背景にある有色系への人種差別的扱いである。標的とされてきた黒人コミュニティから警察の不当な暴力への抵抗は歴史的に続いてきたものだ。公民権運動期にはニューヨーク、フィラデルフィア、ロサンゼルスなど各地での集団行動が起こり、1992年のロス蜂起、「#BlackLivesMatter」というハッシュタグでのスローガンが知られるようになった2012年のトレイヴォン・マーティン事件、そしてフロイド事件に至るまで、事あるごとに大きな抗議行動が続いてきた。警察機構と人種主義の問題は抜本的に解決されず現在へと至っている。

BLM 運動は2020年夏、六十以上の国、二千を超える都市へと広がった。その争点も警察機構の構造改革を超えて、帝国主義や植民地主義など白人至上主義的な歴史の再評価や、社会の各機構に埋め込まれた人種主義の負の遺産の見直し

³⁸ “The Minneapolis Police Choke an Unarmed Handcuffed Black Man to Death,” YouTube (May 26, 2020). <https://www.youtube.com/watch?v=g8hGKB5QDhw>

³⁹ アメリカ史上最大のデモになったとされる。組織された公式なイベントを一日あたり数で数えて、BLM 運動は2020年6月における数日間で1500-2600万名程度の参加者が試算されている。2017年に全米から世界へと広がった反トランプ政権運動「女性の行進」でも300-500万とされておりその大きさが窺える。Larry Buchanan, Quoc Trung Bui and Jugal K. Patel, “Black Lives Matter May Be the Largest Movement in U.S. History,” New York Times (July 3, 2020).

へも領域を拡げながら、垂直にも水平にも議論は広がっていった。

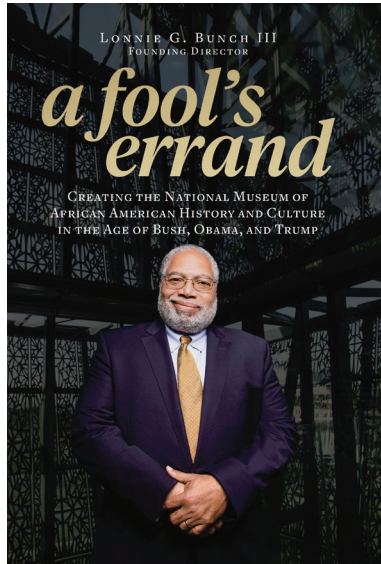
「脱植民地化」というスローガンに要約される、帝国主義と植民地主義の歴史に根差した構造の改革という、より普遍的な問題を解決しようとするベクトルを得たことで、運動の波は、学校や図書館などの教育産業、映画や文芸、美術など各種文化産業、ITやメディアなど情報産業と公的な領域にあまねく浸透していった。当然のように博物館コミュニティもその波に飲まれていくことになった。

BLM運動の拡大をうけて、様々な博物館共同体機関から次々と声明が出された。フロイド事件と続く抗議行動を受けて、国連の協力機関である国際博物館会議(ICOM)の米委員会共同理事長で、スミソニアン協会の長官も務めるロニー・G・バンチが声明を出した。5月31日にスミソニアンのサイトに、奴隷制廃止運動家のフレデリック・ダグラスとフロイドら数々の警察暴力の被害者の名を挙げて、「過去50年間の達成にもかかわらず、私たちは依然として不平等と人種的分裂に引き裂かれた国家であるという現実と直面せざるを得なくなった。民主主義の現状は、もろく不安定である。」と掲載した⁴⁰。さらに6月3日にはそれに加筆する形でICOMのサイトでも声明を出し、博物館の社会的役割について次のように述べた。

博物館は中立ではなく、社会的背景や権力構造、地域社会の闘争から切り離された存在ではない。そして博物館がそれらと切り離されているように見えるとき、それは誤った選択なのである。私たちの社会で高い信頼を得ている機関として、博物館は、その語る物語から職員の多様性に至るまで、あらゆるレベルで人種的不公正と黒人に対する人種主義と闘う責任と義務を負っている。／どの博物館の裏にも人がいる。私たち一人ひとりが、自らの偏見に責任を持ち、自らの特権をチェックするようにならなければならない。私たちは、各自が属するところで人種差別に取り組み、自分自身を改めるやり方を学ぶことにオープンであり続けなければならない。私たちは、世界中の黒人コミュニティの声と功績を大

⁴⁰ “Statement From Secretary Lonnie G. Bunch,” Smithsonian(May 31, 2020). <https://www.si.edu/newsdesk/releases/statement-secretary-lonnie-g-bunch>

きくさせるよう努力しなければならない⁴¹。



図④ ICOM 米共同理事長・スミソニアン協会長官ロニー・G・バンチ。創立初代館長を務めた全米アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館に関する著書の表紙⁴²

ここに見られるのは、博物館という機関のあらゆる側面のあらゆる決定には何かの力学が働いているという視座である。もし博物館が社会から切り離され、「中立」に見えるのなら、それは「非政治的」という態度を以て、「人種的不公正・黒人に対する人種主義」という現状を追認することになるため「誤っている」というのである。

言い換えれば、時代が移り社会の価値観が変化するなかで常に同じ博物館倫理に固執し続けることは、「変わるべきではない」という一種の政治的な態度表明にもなりうるという見解を示していることになろう。博物館を流動する政治学的な力学の現場として捉えるこうした視座は、ミュージアム研究における「博物館

⁴¹ “Museums for Equality: The Time is Now” ICOM(June 3, 2020). <https://icom.museum/en/news/museums-for-equality-the-time-is-now/>

⁴² Lonnie G. Bunch, *A Fool's Errand: Creating the National Museum of African American History and Culture in the Age of Bush, Obama, and Trump* (Smithsonian Books, 2019).

の政治学」と脈づけて理解することもできる⁴³。

声明で明示されていないが、博物館が植民地主義の歴史に由来するという議論は博物館に関わる有識者であれば当然念頭にあったろうし、実際過去十年ほどICOMでは、定期的に更新する「博物館」の定義にこの種の政治性に関する説明をいかに組み込むのかを焦点にした大きな論争が続いてきた⁴⁴。声明は、こうした「博物館倫理」が、ICOMという国連体制の博物館国際機関、とりわけ米国内の博物館コミュニティにおいて規範的に提示されたことを象徴している。同様に全米や世界の大規模美術館・博物館は類似した言明を出している⁴⁵。フロイド事件に始まる2020年のBLM運動は、こうした博物館規範を押し出す強いきっかけとなったと言えるだろう。

声明が示す規範に 대응するように、博物館の脱植民地化事業は様々な方法を採用して展開してきた。例えば、米国各地で続いてきた、リー將軍を筆頭にして、奴隷制を支持した白人至上主義的な「偉人」の彫像の撤去を訴える運動がこの時期再び活発化した⁴⁶。ニューヨークの米国自然史博物館前にある先住民と黒人奴隷を従えたルーズベルト大統領の彫像のように、公的空間を使った顕彰の見直しが展示事業と連動する方法で進められた例もある⁴⁷。コロナ禍は博物館事業の各種デジタル化の流れを急速に進めることになったが⁴⁸、スミソニアンのアフリカ系ア

⁴³ 「ミュージアム研究における『展示の政治学』論の系譜——受容論的転回と展示の詩学」『ムゼイオン』立教大学博物館講座、63、2018、1-20。

⁴⁴ 2019年京都大会では紛糾し一度定義を見送り、2022年のブラハ大会で受理された。ICOM公式の日本語定義文は以下。「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。」“Museum Definition,” ICOM. <https://icom.museum/en/resources/standards-guidelines/museum-definition/>

⁴⁵ Alex Greenberger and Tessa Solomon, “Read Statements from Major U.S. Museums About the George Floyd Protests,” Artnews (June 2, 2020).

⁴⁶ Ezra Marcus, “Will the Last Confederate Statue Standing Turn Off the Lights?” New York Times (June 23, 2020).

⁴⁷ 以下の拙論ではこの過程について論じている。小森真樹「共時間（コンテンポラリー）とコモンズ——ミュージアムの脱植民地化運動とユニヴァーサルイズムの暴力」『広告』博報堂、417、2023、833-77。

⁴⁸ 以下二本の拙論は、コロナ禍前後のミュージアムのデジタル化の状況を比較する形で読むことが可能である。小森真樹「デジタル・ミュージアム・研究——デジタル時代のミュー

メロカ人文化歴史博物館のように、デジタル事業を活用して運動へ貢献する動きもフロイド事件直後から見られた⁴⁹。

この間博物館コミュニティの脱植民地の動きで目立ってきたのは、大規模博物館による文化財帰還（返還）の動きである。旧植民地からの略奪や出どころ不明なコレクション、あるいは非対称な関係での取引・条約など、こうした不公正な歴史に関わってきた大型博物館・美術館は、2020年以降各コレクションの点検作業を始め、歴史的な帰還が相次いだ。米国内でいえば、2021年11月他の大型博物館に先駆けてメトロポリタン美術館がナイジェリア政府への返還を実現⁵⁰、スミソニアンも六ヶ月計画で点検をした上で返還を始めた⁵¹。大英帝国陸軍の残虐な破壊と略奪で知られる旧ベニン王国の物品はその代表例となり、売却等で各国各機関に散逸していた物品の帰還が続いた。

各種旧宗主国の政府も帰還事業へ意欲を見せている。インドネシアに領土を広げたオランダ、アフリカ諸国に植民地を持ったフランス、植民地時代以降取引でも国内各地に民俗学・民族学系の豊富なコレクションを築いたドイツなど各種行政機関の例がある⁵²。他方で大英博物館及びイギリス政府は、これまでも長年返還運動への危機感を抱き、大規模博物館が集うコミュニティのトップの会合で「普遍的博物館 (universal museum)」という概念を発明さえして、大規模館が保持する方が文化財としての価値の普遍性を高め広められるのだという主張を展開してきた。ここにきてもその姿勢を崩していない⁵³。

こうした文化財返還への動きは、実務的な脱植民地運動であると同時に、各機

ジウムとモノと場所』『立教アメリカン・スタディーズ』立教大学アメリカ研究所、40、2018、57-89；小森真樹「コロナ禍で変容する『展示の現場』——第四のミュージアムのデジタル化』『博物館研究』日本博物館協会、56(9)、640、2021、19-23。

⁴⁹ 小森真樹『楽しい政治——「つくられた歴史」と「つくる現場」から現代を知る』講談社、近刊、第十二章。

⁵⁰ Gabriella Angeleti, "The Met repatriates looted Benin works," Art Newspaper (November 22, 2021).

⁵¹ Peggy McGlone, "Why the Smithsonian is changing its approach to collecting, starting with the removal of looted Benin treasures," Washington Post (January 6, 2022).

⁵² 小森近刊、第十二章。

⁵³ 小森 2023；小森近刊、同章。

関が説明責任を果たす形になったといえ、「博物館倫理」の変化を反映したものとみることができる。

民族学博物館及び医学博物館のコレクションにおける「遺体」の扱いの見直しは、法整備が進む一方で、実務的には遅れていた博物館の現場に、BLM 運動拡大の余波が楯を加えるように起こってきたのである。

「ポスト・モーテム」改革と二人の“ウォーク”リーダー

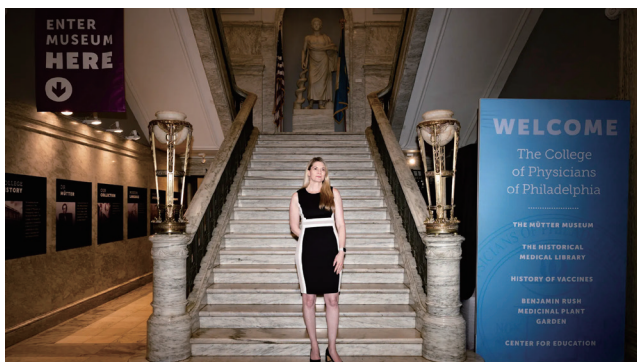
こうした反人種主義運動と博物館の脱植民地化運動の文脈で、ムターにおける改革と倫理変化は、新たなリーダーが外部からやってくる形で着手されることとなった。結果的に、それらは公衆を交えた議論と騒動を開館以来最大の規模で巻き起こすことになる。以下ではこの経緯について、これまで議論してきた歴史や社会変化へと位置づけながら理解していきたい。

2021年8月、小児科医で遺伝学者のミラ・アイアンズがフィラデルフィア医師協会初の女性会長・CEOとして着任することになった。ボストン小児科病院で脚の病気の特殊な症例を専門に臨床・研究してきた医師である。翌年アイアンズは、経営学を学んだケイト・クインをムターと付属図書館の館長に採用した。クインはフィラデルフィアのミッチェナー美術館やペンシルベニア大学考古学・人類学博物館の館長を歴任してきたが、同時に2017年からICOM理事を務め、2023年5月のBLM運動の渦中ICOM共同理事長をバンチから引き継いだ人物である。すなわち、協会の新たな博物館倫理を強く推進する地位にあるといえる⁵⁴。この二人が改革計画を進める中心となった。

⁵⁴ “United States National Committee of the International Council of Museums Welcomes New Leadership. Kate Quinn and Arthur Affleck Elected Co-Chairs of the Board of Directors,” ICOM-US. <https://www.icomus.org/>



図⑤ ムターの母体組織フィラデルフィア医師協会における初の女性会長・CEOとなったミラ・アイアンズ⁵⁵



図⑥ アイアンズと「ポストモーテム」改革を進めたムター館長ケイト・クイン。パンチの後任としてICOM 共同理事長に着任した⁵⁶

2022年に着手されたプロジェクトは「ポストモーテム」と名づけられた。その内容は、インタビューにおけるクインの説明によれば、博物館を「死ではなく、健康と幸福に焦点を当てた」「現代的な施設」にするもので、基本的にはNAGPRAに則ったものだという⁵⁷。6,600名分ほどと目されている展示された人体コレクション

⁵⁵ Judkis, *ibid.*

⁵⁶ *Ibid.*

⁵⁷ “Mütter Museum Controversy, the History of Pockets, the First Emoticon,” WHYY (September 19, 2023). ポッドキャストでの比較的長いクインへのインタビュー。

ンに関する同意のあり方について再点検をおこない、ビュー芸術遺産センターからの助成金 285,500 ドルを資金に、目録データベースを整備する計画が公表された。

2022年1月まず着手されたのが、公開されていた450本以上の教育用公式YouTubeビデオの公開中断である。そこでオンライン「展示」されているコレクションの同意の状況について改めて点検をする間、外部からは閲覧できない状態にしたのである。7月末までの時点で100本ほどのビデオが元に戻されたが、あとで述べるようにこの件は大きな引き金を引くことになる。この件には専門家への助言を求める委員会も設置された。歴史家や医療倫理学者らからなる委員会に、何をオンラインに残し、何を取り下げるべきかについて助言を求めた。展示とアーカイブを含めて全体を監査するには約48ヶ月かかるとされている⁵⁸。

また、展示についての意見を広くパブリックに尋ねる場を設置することも発表された。より当事者性の高いフォーカス・グループを、有色系、障がい者や博物館の会員を対象に構成する。また、三度の公聴会が予定され、2023年10月17日には対面とライブストリーミングの併用で一度目が開かれた（以降はオンラインのみの予定）。こうしたフォーラムの場を設置すると同時に、ランダムな来館者の意見も取り入れる。QRコードを使って展示室の来館者がリアルタイムで展示倫理についてフィードバックを集める計画だ。その質問には、人体を含む展示物が尊重されていると感じるか、遺骨を展示すべきかなどが想定されている⁵⁹。

この改革の課題として考えられるのは、NAGPRAの法枠組みと同様、他の人

⁵⁸ Malcolm Burnley, "What the Hell Is Happening With the Mütter Museum?" PhillyMagazine (September 23, 2023). 公開されている委員の専門家は以下。カリフォルニア州パークレーの博物館コンサルタントのキャサリン・マクグリーン、フィラデルフィアのユニバーシティ・オブ・アーツ教授のモニカ・O・モンゴメリー、フィラデルフィア市長障害者事務所のエグゼクティブ・ディレクターエイミー・ニープス、シアトルを拠点に社会包摂を専門とする博物館コンサルタントのアレシア・ウィットマン、ランカスターのフランクリン・マーシャル・カレッジ教授の科学史・医学史家ニコラス・ボノー、ニューヨークを拠点とする博物館倫理学者でコロンビア大学で博物館人類学を教えるサリー・ヤーコビッチ、マサチューセッツ州ロックビルの国立医学図書館医学史部門の責任者ジェフリー・レズニック、人類学者でプリンマー大学の博物館学部長を務めるモニーク・スコット。Rosa Cartagena and Rita Giordano, "Community members make a case for Mütter to keep displaying human remains," Philadelphia Inquirer (October 19, 2023).

⁵⁹ Judkis, *ibid.*

種マイノリティを包摂できない点である。また、博物館専門機関による指針の曖昧さや拘束力の弱さも指摘されている⁶⁰。例えば全米博物館連合の倫理規程では、遺骨の蒐集や保管、展示に関する決定については、「生きている子孫、及び、その定義が不明瞭な「専門家の最大限の営為 (best practice)」に従うものである、とだけ定めてある⁶¹。

しかしそれらの課題とは別に、この改革の推進にはコミュニケーションの面で極めて大きな壁が立ち上がった。古株の博物館関係者、スタッフ、またファンたちからその改革について疑問の声が次々に上がったのである。

ポストモータムとは、ラテン語で「死の後」を意味する。英語圏では「検死報告」の意味でも通るこの言葉は、ウィットに富んだ人文的なキャッチフレーズによってその魅力を発信してきたムター博物館のプロジェクトには、見かけ上たしかに合致しているように見えた。しかし、本稿冒頭で紹介したように、前協会長のスタンリー・ゴールドファープが改革を進めるアイアンズとクインを「ウォーク・リーダー」と名づけ、その改革と対立を「キャンセルカルチャーがやってくる」と枠づけたように、この改革は対立的で論争的な騒動へと展開していった⁶²。「ウォークな活動家が除菌された安全な場所に作り変えようする」改革は「歴史博物館というよりもむしろ〔彼らの〕政治活動」だと批判する彼の博物館像は、ICOMの宣言に象徴される「中立はありえず権力構造とは切り離せない」という新たな博物館倫理と対照的なものである。

様々な「キャンセル」とオンライン運動

2022年1月、『プロパブリカ』と『フィラデルフィア・インクワイアラー』の

⁶⁰ Ibid.

⁶¹ “Code of Ethics and Professional Practices for Collections Professionals,” Association of Registrars and Collections Specialists Collections Stewardship Professional Network of the American Alliance of Museums (Revised on February 24 2021); “Code of Ethics for Museums,” ICOM(2017 June).

⁶² Stanley Goldfarb “Cancel Culture Comes for Philly’s Weirdest Museum,” Wall Street Journal (June 14, 2023).

調査でムターの名前が挙がった⁶³。これらは、NAGPRA に照らして、先住民の遺骨を所蔵し、まだ完全な帰還がなされていない博物館や研究機関に関する「〔二つの記事によって〕私は実際に遺骨の表現とオンライン上のすべてのコンテンツに目を向けるようになりました。これら記事のタイミングが重なったことで、このプロセスが一気に加速したのです。」とクインはインタビューで答えている⁶⁴。記事が出版された日、彼女はスタッフに博物館のソーシャルメディアアカウントやオンラインリソースから遺骨の事例を洗い出すよう指示し、その中には YouTube のシリーズも含まれていた。全員に宛てた E メールで彼女は、「私たちは管理しているコレクションに対して、見世物的、奇異、あるいは失礼だと思われる可能性から積極的に離れていきましょう」と書いている。同じ調査結果に記載されたロンドンのハンタリアン博物館は、“アイルランドの巨人”として知られるチャールズ・バーンの骨格展示を「撤去」した。このことを知ったクインは、ムターでハッシュタグ付きの撮影スポットとして使用していた“米国の巨人”バナーを「撤去」した⁶⁵。この直後に、前述した YouTube 動画の「取り下げ」があった。

クインは着任後わずか数ヶ月後であり、また前任館での MOVE 事件にまつわる遺体コレクションへの激しい批判の一件が彼女の念頭にあったことも想像に固くない。「MOVE の遺骨の件があったから、なにかのルートで悪い評判が私たちについてくると思っていたようだ」と法人類学者エリン・キマーレは言う。彼女はムターとの共同展示を計画し、過去には骸骨から似顔絵を作成して長い間行方不明だった人物の特定ができたという一件があった。驚くべきことに、1990 年代にはムターの展示から殺人事件が解決したこともあったという⁶⁶。キマーレは、クインが展示計画を「キャンセル」したと主張し、一方クインは、連絡をとって

⁶³ Ash Ngu and Andrea Suozzo “NAGPRA Database,” ProPublica (Jan. 11, 2023); William Bender and Jeff Gammage, “Penn, Temple, Mütter among U.S. institutions still holding the remains of Native Americans,” Philadelphia Inquirer (Jan. 13, 2023).

⁶⁴ Rosa Cartagena and Rita Giordano, “Philadelphia’s Mütter Museum shake-up means it could get less weird,” The Philadelphia Inquirer (Jun. 3, 2023).

⁶⁵ 小森 2021、134 に、掲示されていた頃のバナー写真を紹介している。

⁶⁶ Theresa Conroy, “Murder One, or lesser offense? - Daily News,” Philadelphia Inquirer (Jan. 24, 2007).

いないだけで「キャンセルはしていない」と述べている⁶⁷。

ムターの組織内部では、改革を主軸とする新たな運営方針をめぐって対立が生じていた。ジャーナリズムの取材に現職や過去のムターの職員やボランティアたちが匿名で答えたところによれば、アイアンズが「展示のなかには見るのに耐え難いものがある」と述べ、その意味を「見せ物に等しい」という言葉で表現していたこともある。クインは、先天性の異常のある胎児および幼児の遺体を展示することに会議で難色を示していた⁶⁸。

諮問機関のウッド研究所で図書館・博物館委員会の委員長を務めるマリアンヌ・ハーメルは、キマーレと協力して滞っていた法医学展示を進めてきた人物である。彼女はここ半年でスタッフの流出があったと強調し、約50名のうち、主要な職員を含めて13人が退社し、それを「不穏な傾向に対する反動」という言葉で表現している。2023年5月17日、理事会宛に懸念を伝えて、「協会は現在、恐怖の場に導かれています。このような姿勢は、協会と博物館がとるべき姿勢とは全く正反対のものです。つまり、教育のために遺骨を丁寧に用いることに関するオピニオンリーダーであり先駆者である同館の姿勢に反するものですよ。責任を回避し、論争を避けようとすることで、協会経営陣は、必死に避けようとしていたその批判をまさに招くことになったのです。」と痛烈に批判した⁶⁹。

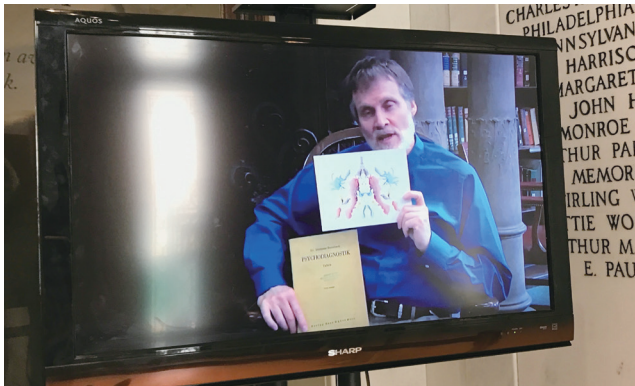
さらに表立ち大きなアピールに映ったのは、前館長ロバート・ヒックスの言明である。長年同館の活動に尽力してきたヒックス氏は、騒動時点まで上級専門研究員としてさらにムターへと関わってきた人物である。取り下げられたYouTubeコンテンツにも、学芸員のドーディと一緒に度々登場してきた博物館の「顔」であった。彼は生涯の多くを捧げた同館での職を「辞め/止め」た。また妻とともにその全財産を協会に寄付することを遺志としていたが、今回の一件によってその計画を「取り下げる」ことをこのとき発表した⁷⁰。

⁶⁷ Cartagena and Giordano, *ibid.*

⁶⁸ *Ibid.*

⁶⁹ *Ibid.*

⁷⁰ *Ibid.*



図⑦ クインの前任館長口バート・ヒックス。ムター公式 YouTube 番組展示風景（筆者撮影 2017年2月19日）

こうした高まる内部対立に対して、これまでに来館したファンたちを中心に外部からも抗議が起こっていった。特にオンライン動画の削除後、報道が増えた5月半ばからはソーシャルメディアや掲示板サイトでオンラインでの議論や抗議の声が見られるようになった。ウェブ上で改革を問題視する声を掲げ、請願書運動を行う抗議団体「ムターを守れ」の活動が運動を牽引した。クインとアイアンズの解任を求める署名は三万五千超を集めた⁷¹。

こうした動きはジャーナリズムにも報じられるようになり、人々の声が可視化されることで、さらなる加熱を招いた。5月頃からはフィラデルフィア地域局の『WHYY』や地域紙『インクワイアラー』などが時事的に報じ始め、6月に『ウォールストリート・ジャーナル』、7月に『ワシントンポスト』、8月に『ニューヨークタイムズ』『ガーディアン』と、全国紙や海外紙もそれらをオピニオン的な記事として梓づけていった⁷²。冒頭に挙げた元会長の記事もこのとき書かれたもので

⁷¹ 「ムターを守れ (Protect The Mütter)」によるオンライン署名サイト。2023年10月29日時点で35,355筆。“Protect the Integrity of the Mütter Museum.” change.org.

⁷² Alan Yu, “Mütter Museum takes down online exhibits, YouTube videos,” WHYY (May 13, 2023); Cartagena and Giordano, *ibid*; Goldfarb, *Wall Street Journal* (June 14, 2023); Judkis, *Washington Post* (July 27, 2023); Edward Helmore, “Macabre curiosities: top US medical museum confronts skeletons of its past (US news),” *The Guardian* (August 13,

ある。こうした報道を通して提示された理解の枠組みが、「ウォーク対ステータスクオ（現状維持）」や「キャンセルカルチャー」などである。本稿も含め、ムターで起こった事態と新たな「博物館倫理」を理解する枠組みについて一定の影響力を持ったと考えられる⁷³。

さらに、報道記事に付いているコメント欄は、声の可視化と反響に一定の役割を果たしたものと思われる。たとえばタイムズ紙のあるコメントにはこうある。

これは“ウォークネス”の母（ドイツ語で Mütter は母。なんで誰も指摘しないのか謎）の誤ち。だから、すべてを“クリーン〔健全な、の意味を含む〕”に洗い落とそう。言論、書籍、歴史、何でもかんでもクロロックスブランドの洗剤で洗濯機にかけよう！ ネイティブ・アメリカンの遺体をきちんと埋葬することには賛成だけど、ミイラをミイラと呼ぶことや、病気やなんやが人の体に引き起こすもの全てを見せるのは、どうだろう？⁷⁴ 私は鉄の肺〔人工呼吸器〕の写真が好きだ。ポリオの時代には多くの命を救った。今生きている何人の人が覚えているだろうか？ そうだな、いっすすべての博物館を閉鎖して、AIが生成した偽の環境に置き換えるべきかもね。そうすれば、中に入ってメニューから何を「見たくない」か選べるよね。レオナ（ニュージャージー州8月16日）⁷⁵

全九二件と多数の読者から良評価を得た近隣ニュージャージー州からの投稿で、

2023); Franz Lidz, “Mütter Museum in Philadelphia Weighs Dialing Down its ‘Electric Frankness,’” *New York Times* (August 13, 2023).

⁷³ ムター博物館は5月12日以降ウェブサイトに掲載する形で、博物館・理事会の声明と各報道記事それぞれに対する応答を残している。“Mütter Matters,” Mütter Museum. <https://muttermuseum.org/mutter-matters>; 特集内の応答記事は以下など。“Philly Voice Article”(May 12, 2023); “Response to Philadelphia Inquirer Article” (August 24, 2023); “Change.org Petition” (May 31, 2023).

⁷⁴ 「ミイラ (mummy)」という言葉は遺体をモノ扱いする敬意のない言葉だとして、「ミイラ化した遺体 (mummified remains)」と言い換える博物館が、およそ2010年代後半以降欧米では増えている。Rhea Nayyar, “Forget ‘Mummy,’ It’s ‘Mummified Person’ Now,” *Hyperallegic* (January 27, 2023).

⁷⁵ Lidz, *New York Times* (August 13, 2023). のコメント欄。

「ワーク」や「PC」な規制への揶揄的な言動ととれるコメントだ。この投稿に対して、さらに多くの賛同コメント、また少数だが批判コメントもレスポンスされている。一方で次のような意見も見られた。

この博物館の一番の魅力は、人間の悲劇をスペクタクルとして扱った20世紀初頭の雰囲気だ。スペクタクルを取り除いたら、いったい誰が来るというのだろうか？（ベガスのM ネバダ州ラスベガス8月16日）⁷⁶

コメント欄でのやりとりは、特定の嗜好や関心で集まりやすい掲示板サイトや、アルゴリズムによる傾向性があり流動的なソーシャルメディア以上に、不特定への発信力があるかもしれない。大陸を横断し、東西の読者らのコメントが同時に集まる取東地点ともなっている。メディア学者のヘンリー・ジェンキンスが「コンヴァージェンス・カルチャー」と呼ぶところのウェブ上のコミュニティは、地理的に超越したネットワーク構築し、より薄い関係性で人々をつなげるようになった⁷⁷。こうしたファンの関わり方は、ウェブ時代の博物館の「オーナーシップ」概念の変化を象徴している。

9月下旬、アイアンズはフィラデルフィア医師協会のCEO 辞任を発表した⁷⁸。以前医師として勤務していたボストン小児病院に戻り、遺伝学・ゲノム学の副主任に就任するためというが、こうした内外の摩擦を受けてのものかに関しては明言されていない。

アウトサイダー文化とアイデンティティの政治

ムターの改革における騒動は、新しい博物館倫理が一般に根づくには時間を要

⁷⁶ Ibid.

⁷⁷ Henry Jenkins, *Convergence Culture: Where Old and New Media Collide* (NYU Press, 2006), 222 (渡部宏樹・北村紗衣・阿部康人訳、『コンヴァージェンス・カルチャー：ファンとメディアがつくる参加型文化』晶文社、2021年)。

⁷⁸ Michael Tanenbaum, “Mira Irons, College of Physicians of Philadelphia CEO, resigns amid Mütter Museum’s ethical review,” *PhillyVoice* (September 27, 2023).

ミュージアムで「キャンセルカルチャー」は起こったのか?—脱植民地化と人体のアイデンティティ政治をめぐる博物館倫理 小森 真樹

することや、また、極めて丁寧なコミュニケーション過程が重要だということを示唆している。

他方で、ムターのコレクションには、遺体や障がいのある身体という、主流の社会規範から逸脱した対象と見られやすいものを保持していること、さらには、それを「芸術」「娯楽」という意味づけの元で美化して価値づけてきたこと、そしてそれらは理念上はパブリックへと開いて「人々に帰属すべきもの」と運用してきたこと、という三つの大きな特徴がある。こうした文脈において、「社会に受け入れられていない (unaccepted)」と感じている人々が逸脱文化の居場所として愛好されてきた側面がある。

PCとは、他者を不快にしたり傷つける可能性のあるものを公的領域で制御する工夫である。そのため逸脱文化はその対象に含まれやすい。公的な領域から排除されてきたと感じているものにとり、「われわれの居場所」に対する「正しさ」による抑圧と受け取られやすい構図にはあるだろう。また、クインとアイアンズはともに高学歴のエリート女性である。他館での勤務時代からスタッフや取引先への過酷な対応で知られていたというクイン個人の資質とは別に⁷⁹、ジェンダー、学歴、階層など属性面での対立構造も検討に値するだろう。改革推進派と現状維持派は、アイデンティティ政治として対立しやすい構造にあったといえよう。

10月17日には、騒動後初の公聴会が開かれ、対面で60名以上が参加し、ストリーミング配信で160名ほどが視聴した⁸⁰。ムターの展示は障がいを持つ者に「社会に受け入れられている」感覚をもたらしている——サウス・フィラデルフィアを拠点とする作家・ジャーナリストのキム・ケリーはそう語った。「ムターの先天性奇形に関する展示は、フィラデルフィア市内で唯一、私のような人間が展示されている場所です。私は、博物館が倫理的な審査を受けることを全面的に支持しますが、私たちの中には、ムターのような、複雑で、時には不気味な輝きを

⁷⁹ Burnley, PhillyMagazine (September 23, 2023).

⁸⁰ 手話付で開催。10月25日になり英語字幕付でYouTubeで記録動画が公開された。講義団体「ムターを守れ」は公聴会について署名サイトで報じ、「皮肉なことに動画のコメント欄は開かれていない」と批判した。

放つ場所が、人間であると感じられる唯一の場所なのだとということを、ここにいらっしゃる皆さんに強調したかったのです。」⁸¹ 彼女は左手にロプスター・クロー症候群と呼ばれる稀有な外反母趾を持つ。「私たちのような人々は何世紀もの間、驚異や恐怖、好奇のばけものとして扱われてきました。でも私は怪物でもないし、グロイわけではないんです。人間なんです。この世界に自分たちが存在すると〔ムターの展示で〕確認することができるべきではないでしょうか。たとえそれがガラス越しだとしても。」⁸²

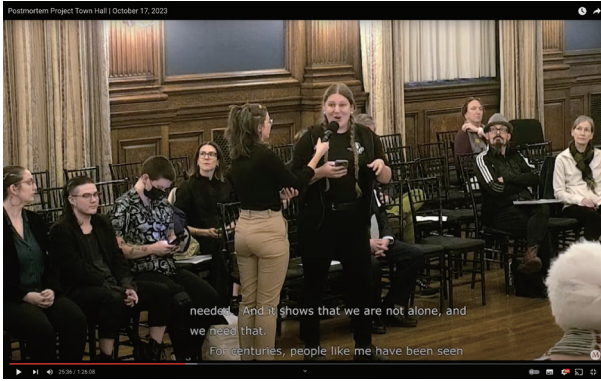
稀有な「障がい」の展示は当事者にとって大きな意味を持っている。公の空間に展示されること、また芸術という肯定的な文脈で展示されることはさらなる意義を持つことだろう。ケリーはこうした機会が奪われる虞れを訴えた。博物館の展示とは、表象のアイデンティティ政治なのである。

公聴会ではその他にも同様に、障がい当事者表象のアイデンティティ政治の文脈から意見が述べられた。ある医師は、ペンシルベニア大学博物館や米国自然史博物館などを挙げつつ、これら文化人類学の民族学博物館と違うのだと、医学博物館の独自の文脈を強調した。「医学が秘密であった時代、素人が病気を理解することができなかった時代、そんな時代は終わったのです。私のような医師だけでなく、一般市民もこれらの病気を見る権利があり、これらの病気をよりよく理解する権利がある。ムターの現状を変えることには絶対に反対だ。」⁸³

⁸¹ Cartagena and Giordano, Philadelphia Inquirer(October 19, 2023).

⁸² Mütter Museum of the College of Physicians of Philadelphia, "Postmortem Project Town Hall October 17, 2023" YouTube(October 25, 2023).

⁸³ Cartagena and Giordano, *ibid.*



図⑧ ムターの「ポストモータム」脱植民地化改革への反発を受けて開催された公聴会で意見を述べるキム・ケリー。YouTubeでも公開されている⁸⁴

「フォーラムとしての博物館」の理想と現実

再びコミュニケーションの側面を考えるならば、博物館倫理の変化を実装するムターの改革過程に見られたのは、原則として、社会にいるすべての人々に開かれてその運営を進めるべきであるという近代博物館の理念に基づいた運営において生じる困難でもある。すなわち、市民の対話のためのツール「フォーラムとしての博物館」の実現の理想と困難である⁸⁵。

あるジャーナリストの調査分類に基づき、この博物館倫理改革をめぐるアクターを整理するならば、次のようになる⁸⁶。

- A) 「21世紀への移行を望む指導者たち」
- B) 「保存か解体かを望む歴史的に不利な立場にあるグループの代表者たち」
- C) 「その狭間にいるスタッフや学者たち」
- D) 「深遠で不気味なこの場に特別なつながりを感じる美術館のファンたち (医

⁸⁴ Mütter Museum, *ibid.*

⁸⁵ Duncan F. Cameron, "The Museum, a Temple or the Forum," *Curator: The Museum Journal*, 14(1), 1971, 11-24.

⁸⁶ Judkis, *ibid.* 表現は、記事で使われたものを日本語訳したもの。

師・葬儀屋・ゴス・病への好奇心が強い人たち)」

ムターというフォーラムでは、歴史的な文脈を念頭に置きつつこれらの立場の間で調整が今後も進んでいくことであろう。

医学博物館と民族学博物館には、人体コレクションを有するという状況特有の困難が共に存在する。そこには違いもあり、民族学コレクションには、部族・民族など代表共同体の存在や、文化の違いに基づく摩擦などがある。医学博物館では、死者に同意をとることができない点や、誰もが関係する生死というアイデンティティを扱う一方で、病理学コレクションは「障がい者」というマイノリティのアイデンティティと関わっている。反人種主義や、遺体＝人間の尊厳を守ることが優先されるべきという見解は、現代の米国の博物館倫理においては共通して受け止められているように見えるが、こうしたコレクションの特性の違いなどに注意しつつ、フォーラムをいかに機能させることができるのか、その舵取りは極めて難しいものである。

フィラデルフィア医師協会理事のジュリア・ハラーは公聴会終了後、このように総括した。「まあ、強烈なものでした。我々〔協会〕が望んでいた通りだったと思います。〔参加者らの〕感情の激しさを考えると、彼らが自分の人生において何の権力も持たず、人々が死ぬことについても何の権力も持っていないと考えているのだと、痛みや植民地的慣行について語ることも含めて、自分たちが発言できると考えてくれたことが本当に嬉しかった。」

おわりに

本稿で検討してきたのは、脱植民地化プログラムという新たな博物館倫理・規範の実装に伴うコミュニケーションの一断面である。とりわけ博物館で起こる「キャンセル」と名づけられた現象について考えてきた。

カメルーンの思想家アキル・ンベンベは「死政治 (necropolitics)」概念を創案して次のように論じた。近代において人々は、政治・社会制度によって生きる状態を制御された「生政治」の状態にある。ミシェル・フーコーのこの概念は、

実のところ生死を分ける領域にまで及ぶ。アパルトヘイトやパレスチナの植民地状態、政治的・宗教的な殉死や自爆テロなどを例にとれば、生ある人々の「死」は政治経済的な制度において決定づけられており、そこでは人種主義は甚大な影響力を持つ⁸⁷。ンベンベのこの議論を敷衍すれば、博物館はまぎれもなく死政治の装置なのである。ポストモータム（死後の扱い／診断）において「モノとしての人」は、人種主義という制度的権力構造の中に置かれてきたのである。

「唯一、私のような人間が展示されている場所」という当事者の指摘は極めて重い。異形の身体が公的な博物館という空間で適切に——「見せ物」でなく学問と教育の対象として——公開されていることが、障がいと生きる人や、「受け入れられざる」者のアイデンティティ・ポリティクスにおいて重要な意味を持っている。博物館は自分ごと＝オーナーシップの場になりうる。他方で、理事が「自分の人生においても、死においても何の権力も持たないもった人たちが発言できると考えてくれた」と述べたように、博物館は声を聴くフォーラムにもなりうる。

ムターではキャンセルカルチャーが起こっていたのだろうか。キャンセルは、新しい倫理を携えた改革者たちが博物館にもたらしたものではない。その歴史において真にキャンセルされ続けてきたのは、死者の声であり、人種的、性的、身体的マイノリティの主体性である。こうした「声」への想像力を働かせることで博物館は、ポストモータム・ポリティクスの現場になり、ゆえにポリティカルなアクションを起こす交渉のためのツールにもなりうる。

死とは、誰しも避けることができない点で平等だと言われる。博物館という場と一体となり叩かれる、善き「ポストモータムの政治」を誰しもが信じることができる、そのような場としてミュージアムという存在はあり得るのだろうか。

⁸⁷ Achille Mbembe, *Necropolitics* (Duke University Press 2019); Achille Mbembe, "Necropolitics," *Public Culture*, 15(1), 2003, 11-40.

